えどがわの女性

vol.43
2022年
1月

「うちでは海苔と蓮田をやっていました」
－半農半漁の家に育って－

宇田川（うだがわ） 信子（のぶこ）

1941年（昭和16年）
江戸川区船堀生まれ
船堀在住

家の仕事は

私の生まれる前から、家では海苔と蓮田（はすだ）をやっていました。海苔は11月から始まって翌年の3月くらいまでやります。夏にはヨシを編んでよしずを1,500枚くらい作っておきます。ヨシは前年の冬に刈り乾燥させておいたものを使っていました。木更津（千葉県）の海で海苔の種をつけるのですが、流れによって育ちやすい所とそうでない所があるようで、毎年くじ引きで場所を決めます。明治生まれの母は、くじ運が強かったので良い場所が取れたみたいです。木更津の海で育ったものを、葛西沖の養殖場に持ってきていたようです。

海苔をやっている家は船を持っていて、家の前の川（新川（しんかわ））につないでありました。海苔が採れる時期になると、大きな船（荷足船（にたりぶね））にベカ舟（ぶね）を乗せて葛西沖まで行って、そこでベカ舟に乗り換えて海苔を採ったようです。真夜中の2時、3時に出て行き、海苔を採り朝方帰ってきます。採ってきた海苔を刻んで、よしずにすき取って干します。うちなんかの場合、田んぼのあぜ道に杭を打って干し場をつくっていましたね。海苔は朝7時ごろから午後2時ごろまで干していました。先に裏を、昼ごろに表に返して干します。そうしないと海苔が縮んじゃうんですよ。海苔に艶（つや）があるかどうかで、値段が違ってきます。天気が悪いと味も落ちるし手間もかかる。できあがった海苔を、夜、10枚一束にして縛ります。そういうのはちょっと手伝ったかなぁ。でも、ほとんどなんにも手伝わなかったですね。「手伝いな」とも言われなかったし。言われなくても手伝えば良かったのかもしれませんが、しょうがないですね。

◆ベカ舟で海苔を採る様子

海苔は3月くらいで終わるので、4月からは蓮田に取りかかっていました。蓮田は泥沼みたいで、すごく深いんです。腰くらいまであったのかな。5月ごろから蓮の根を植えると9月いっぱいには根っこが大きくなってレンコンになるんです。葉っぱは枯れてもそのまま放っておいてもいいんです。

◆海苔の干場の様子

12月にお正月用にハスを掘ります。洗って藁（わら）で4kgずつに束ね、大田市場（大田区）に出すわけです。夕方になると車が回ってきて、持って行ってくれるんです。出荷できない小さいレンコンは、家できんぴらや天ぷらにして食べました。また、近くに漬物屋があって、福神漬けの材料となりました。海苔と蓮田は両親と兄がやっていました。

40年勤めました

昭和16年（1941年）、私は、ここ（船堀）で生まれました。3人きょうだいで兄と妹がいます。

3つ違いの兄は山形県の赤湯に疎開していて、昭和

◆蓮田の様子

※写真は江戸川区郷土資料室提供

江戸川区聞き書き研究会

聞き書き研究会は、江戸川区を愛し、江戸川区で強く逞しく生きた女性の姿を聞き書きとして残すため、江戸川区女性センターの区民ボランティアが2010年に始めた活動です。女性センターは2020年に人権・男女共同参画推進センターに統合され、この活動を所管しています。

20年（1945年）に戻ってきたときは平井へ迎えに行きました。平井から荒川の土手沿いを歩き、船堀橋を渡って帰ってきたのではないかと思います。

小学校は第一松江小学校（現：船堀小学校）。昭和23年（1948年）の入学です。3年生の時の遠足は柴又帝釈天（葛飾区）でした。一人で集合場所の今井まで行って、そこから皆で江戸川の土手沿いを歩いて柴又まで行きました。学校にプールがなかったので、今の松江小学校まで歩いて行っていました。当時はどこに行くにも歩きでしたね。松江一中から江戸川高校に進学しました。当時進学したのは学年の3分の1くらいだったと思います。船堀小学校前から錦糸町行きと平井行きのバスはあったのですが、新小岩行きはありませんでした。高校に通うには、ニッパツ前（日本発動機：現、京葉交差点）のバス停で降りて、そこから学校まで歩きました。

高校の修学旅行は九州でした。私たちが阿蘇山に行ったのは3月31日。ケーブルカーの開通したのが4月1日だったので、乗れませんでした。

卒業して、昭和35年（1960年）の4月に平井にある自動車部品や家電のゴム部品を造る会社に就職しました。社員は250人程いました。会社にはいろいろなサークルがありました。観劇、ハイキング、卓球、野球、テニス、華道など。私は観劇部に所属しました。都民劇場が銀座にあって、勤務時間中に観劇のチケットを取りに行った時に、お茶などして銀ブラをするのが楽しみでした。私は事務職でしたが、会社は結構楽しかったんですよ。私の名は「信子（のぶこ）」っていうのですけど、「しんこちゃん、しんこちゃん」って。家庭的な会社だったんですよ。正月やお盆の休みは、取引先の大きな会社（トヨタや日立）の休業日に合わせていたので、1週間くらいありました。正月休みにはスキーに行き、一級を取りました。

初めて行った海外旅行は、香港、マカオでした。今と比べると、1ドルが360円だったので大変でした。それから毎年のように友だちと一緒に海外旅行に行きました。一番長かった旅行は昭和50年（1975年）の年末から正月にかけての「ヨーロッパ一周10日間」でした。一番感動したのは、グランドキャニオン（アメリカ）の夕日と、とても大きく見えた星です。建物より風景が好きですね。国内旅行は年に何回も行き全部の県に行きました。お給料は、旅行、お稽古事、着物、美味しい物を食べることにかけましたね。会社を辞めたのは、平成12年（2000年）。18歳から58歳まで。ちょうど40年ですよ。

兄夫婦と住んでいます

ずっと船堀です。平成3年（1991年）に母が82歳で、平成8年（1996年）に父が88歳で亡くなりましたが、今も兄夫婦と住んでいます。妹も元気で近所にいます。父は二男だったので、今住んでいる家はお祖母ちゃん（父の母）が建ててくれました。

昭和36年（1961年）ごろには船堀で蓮田をやる家はなくなっていました。船堀地区ではうちが最後だったみたいです。最後のころは父が細々とやっていました。兄はすでにサラリーマンになっていました。昭和37年（1962年）に「葛西浦漁業権放棄」というものがあり海苔業も終わりました。

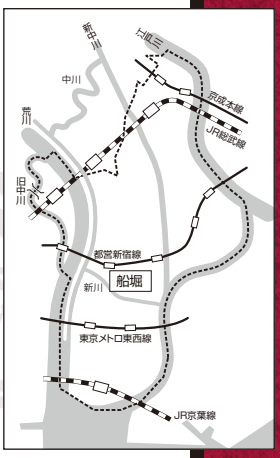
お稽古事をいろいろやりました。洋裁、和裁、料理、お花、編み物。洋裁学校は小岩なんですよね。夜、行くんですよ、仕事が終わってから。桂由美さんのお母さんがやっていた東京文化学園でした。そこへ2年行って。その後しばらく経ってから、飯田橋の桜ヶ丘洋裁学校に行きました。そこでは毛皮まで縫いましたね。江上トミさんの料理教室へも行きました。最初はお嫁に行くつもりで始めたお稽古事ですが、やっているうちに趣味になりました。

◆葉彩画

押し花は53歳から75歳までやりました。始めてから2年くらい経ったころにインストラクターの資格を取りましたが、人に教える気はありませんでした。「葉彩画（ようさいが）」も長くやっています。葉彩画というのは落ち葉の絵で、葉っぱの自然の色を活かして絵をつくるものです。65歳の時に脳梗塞で4ヶ月ほど入院しましたが、後遺症はあまりなかったですね。

同じ年に始めた健康体操（きくち体操）も、コロナ禍で閉会するまで15年ほど在籍しました。何かをやっていてそれが終わると、また何かやりたくなるんですよ。船堀地区も昭和40年代には畑だったところに都営住宅が建ち、50年代には公団住宅や民間のマンション、スーパーマーケットなどができました。池だった場所にゴルフ練習場もできました。子どものころ、ホタルが飛んでたんですけどね。昭和58年（1983年）の12月には船堀駅が開業して、とても便利になりました。平成11年（1999年）には「タワーホール船堀」ができて、人がより多く集まり賑やかになりました。

今、コロナ禍で休んでいるけれど、区のボランティアで「布絵の会」というグループにも入っています。図書館や施設などに寄付する布絵本やエプロンシアターの人形などをつくる活動もしています。コロナ禍が収束したら、まず海外旅行がしたいです。温泉もいいですね。これからも何でも楽しみながら長く続けたいです。



◆ インタビュー／2021年4月
2021年9月
◆ 聞き手／山本國子、岡西和子、小宮和枝
◆ コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆
総務部総務課
人権啓発係
☎6638−8089